

日本学術
会議

北海道地区会議ニュース

発行 日本学術会議北海道地区会議

No .43
2010 9日本学術会議「日本の展望」と
総合科学技術会議の第4期基本計画

岸 玲子

北海道大学環境健康科学研究教育センター長
(日本学術会議北海道地区会議代表幹事)

日本学術会議は、今後10年から20年先を見据えた我が国における学術研究の目指すべき方向を、長期的視野から検討してきました。その結果を提言「日本の展望 学術からの提言2010」として取りまとめ公表しました。本提言は、持続可能な社会の構築を展望して、人文・社会科学、生命科学及び理学・工学の全ての諸科学を包摂する学術からの提言です。そのため21期(2008年10月から2011年9月)の最も大きな課題として位置付け、「日本の展望委員会」を作り会員210名の多くがその委員となりました。学術会議をあげて、「13のテーマ別・分野別作業分科会提言」及び「31の分野別委員会報告」を立ちあげ44の提言を作成しました。次のURLからご覧になれます。

<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/tenbou/teigen.html>

さて、御承知のように、日本学術会議は昭和24年(1949年)1月、「科学が文化国家の基礎であるという確信の下、行政、産業及び国民生活に科学を反映、浸透させることを目的として、内閣総理大臣の所轄の下、政府から独立して職務を行う『特別の機関』として設立された」科学者コミュニティを代表する機関です。日本学術会議の使命として現金澤会長は、その談話の中で「社会のための科学の推進(Science for Society)」と、「科学のための科学の推進(Science for Science)」を挙げられました。大きな改革がなされた20期以降は、アカデミズムがもっと国内外の

社会のありように積極的にかかわる必要があるという認識が「社会のための科学の推進(Science for Society)」の根底にあります。その提言を軽く見ることはできないはずですが、問題はそれが現実の政策に活かされるかどうかでしょう。

同じ内閣府にあって総合科学技術会議は、日本学術会議とは車の両輪と言われます。私は実は最近までその位置付けをよく知りませんでした。幸い昨年秋から、基本政策専門調査会専門委員として第4期科学技術基本計画策定の経過に関わる機会を得ました。しかし出席して感じたのは総合科学技術会議と日本学術会議の間の大きなギャップです。総合科学技術会議が主として扱うには「科学技術」(science based technology)という日本独特の言葉に代表されるように、産業に結びつく応用的・技術的研究の強化、科学研究投資の重点化などにあり、現実の社会が要請している課題や、それを支えるはずの基礎科学や、社会システム改革など人文・社会科学を含む研究や政策については、これまで取り上げられませんでした。しかし第4期計画は直面する課題は第3期までに比べてはるかに大きいので、社会システム改革の重要性や地域における科学技術の重要性などが書き加えられました。この点は審議の中で個人的にも何度か発言し指摘させてもらいよかったですと思っています。しかしグリーンイノベーションはともかくライフイノベーションに関しては第4期計画で書かれる具体的政策が真に現代社会の人々の健康やQOLを向上させるものになるかどうか？パブリックコメントを求めた時点まででは、専門家の立場で見るとやや心配なところもあります。

心配の理由は、総合科学技術会議の位置づけにあります。その使命は内閣総理大臣の諮問に応じて科学技術の総合的かつ計画的な振興を図るための基本的な政策について調査審議すること。内閣総理大臣又は関係各大臣の諮問に応じて科学技術に関する予算、人材その他の科学技術の振興に必要な資源の配

分の方針その他科学技術の振興に関する重要事項について調査審議すること。科学技術に関する大規模な研究開発その他の国家的に重要な研究開発について評価を行うこと、関係各大臣に意見を述べることとされておりますが、第4期計画を書くのは誰なのか？それに携わるのは科学・技術（science and technology）専門家でなく、“出口”を最初から意識した（science based technology）一辺倒のようにも見えるからです。技術を支える基礎科学や、人文社会科学の問題提起が国や地域の地域産業育成、人々の生活向上にも必須ですが、その点が弱いようにも感じられるためです。たとえば地区会議ニュースの今号には昨年秋からの私たち、北海道地区会議での諸活動が紹介されていますが、取り上げてきたのはまさに科学・技術（science and technology）です。その両者の力があいまって地域振興、国の持続的な発展ができることを私たちは確信します。

日本学術会議から今春出された提言はその要旨に

あるように我が国がグローバル化の潮流と変動の中で明治の開国以来とも言える変化・変革の時期を迎えている今日、学術の長期的文脈の下に「科学技術」をしっかりと位置付け、新しい、国際性豊かで独立性・独創性に満ちた科学・技術（science and technology）の発展を目指すことが極めて重要な国家的課題と考えて書かれています。このように『日本の展望 - 学術からの提言2010』は第4期科学技術基本計画策定に際しての提言として並行して（やや先行して）まとめられたものです。

これからどのように日本学術会議の提言が政府の第4期科学技術基本計画策定に生かされるか？私たちは見守りたいと思います。総合科学技術会議のパブリックコメント<http://www8.cao.go.jp/cstp/pubcomme/kihon4/honbun.pdf>には北海道からたくさんの方が届いたでしょうか？ぜひ皆様からたくさんのお意見を寄せられますようにお願いします。

日本学術会議北海道支部学術講演会 「北海道から地球の未来を考える」

中島 秀之

公立ほこだて未来大学学長
(日本学術会議連携会員)

北海道支部の活動の一環として表記の講演会を開催した。学術会議の会員が中心となって話す通常の講演会とは若干趣を新たに、ゲスト中心のプログラムを組んだ。理由は以下の趣旨に書いてありだが、科学技術による未来社会を語るに相応しい人選としてSF作家を考え、彼らと学術会議会員とのコラボという形をとり、なおかつ司会はマスコミ代表として「理系白書」の仕掛け人をお願いした。

SF作家の一人目は『パラサイト・イヴ』でデビューした、薬学博士でもある瀬名秀明氏。最近では科学ノンフィクション『ロボット21世紀』『ミトコンドリアのちから』などの著書もある。氏はまたパイロット免許の保持者で、積極的に空も飛んでいる（『大空の夢と大地の旅 ぼくは空の小説家』という著作がある）ことから、空からの話題も期待した。

二人目は逆に海を舞台とした作品の多い藤崎慎吾氏。米メリーランド大学海洋で河口部環境科学の修

士を持つ。『クリスタルサイレンス』でデビュー、『ハイドゥナン』などの作品のほか、『深海のパイロット』や『日本列島は沈没するか？』などのノンフィクションもある。水深1500mの海底まで訪ねたほどの海好きだそうだ。

学術会議からの講演者としては、公立ほこだて未来大学学長の中島秀之。人工知能を専門としており、最近ではITの社会応用（あるいはITで新しい社会の仕組みをデザインすること）に注力している。瀬名さんと共著の「知能の謎」もある。

司会は毎日新聞の元村有希子氏。「理系白書」の仕掛け人として有名だが、その功績で第一回科学ジャーナリスト大賞を受賞。著書に「理系思考」など。理系白書ブログ管理人としても活躍中。

以上のテーマ講演をサンドイッチする形でオープニング講演には学術会議副会長の鈴木興太郎、クロージングには日本学術会議北海道地区会議代表幹事岸玲子という構成とした。

以下は講演会のパンフレットから：

【趣旨】 理科離れが問題にされている。しかしながら、山積みしている地球温暖化などの環境問題を解決するには、科学技術が不可欠である。そこでは、グローバル化の中で相互依存関係を深める社会の複雑な問題解決に寄与しうる科学技術の力が求められ

ている。科学技術は今、地球にどのような未来を描き、人々にどのような夢を与えうるのだろうか。未来を創造するうえで、情報技術はどのような貢献をできるのだろうか……。このような問題に、日本で唯一、「食料自給率100%超」を誇る北海道から、「解」を発信したいと考える。

鍵はIT(情報技術)応用にあると考えている。IT(情報技術)とはインターネットのことだけではない。もっともっと大きな可能性を秘めている。「情報」を活用することによって、「物質」や「エネルギー」を補うことが可能である。情報は物理量ではないから、自然法則の制約が少ない。制約はむしろ人間の側にある。IT応用の鍵は想像力にある。そのために、科学技術をバックグラウンドに持つ理系SF作家に登場いただく。科学技術を「空から」、「海から」...、様々な角度から俯瞰し、未来を語るこのことができる方々に集まっていただいた。

主催：日本学術会議北海道地区会議

共催：公立はこだて未来大学

日時：2009年11月7日(土) 13:30 - 17:05

会場：公立はこだて未来大学 講堂

【プログラム】総合司会：毎日新聞記者(「理系白書」の)元村有希子

13:30 - 14:00 オープニング講演：日本学術会議副会長 鈴村興太郎(早稲田大学)「地球の未来を考えるために：人文学・社会科学が果たす補完的役割」

14:00 - 14:30 問題提起：日本学術会議連携会員 中島秀之(公立はこだて未来大学)「ITは人類を救うか？」

ITは様々な可能性を秘めている。現在我々が直面している様々な問題もITで根本的に解決できる場合がある。過疎化、環境問題、医療問題などを例にとり、それらの問題をITで如何に解決できるのか?を例示し、一緒に考えて行く視点を提供する。

14:30 - 14:35 コメント：元村有希子

14:45 - 15:15 講演1：瀬名秀明(SF作家)：青い空から未来を語ろう

パイロット免許を取得して気づいた「3次元的思考」をもとに、近年社会的にも大いに注目されているインフルエンザ・ロボット・環境知能の諸問題について語る。未来へのまなざしを来場者の皆様と共に探る。

14:15 - 14:20 コメント：元村有希子

15:20 - 15:50 講演2：藤崎慎吾(SF作家)：SF的視点からの「多様性」

環境問題を論じる際によく使われる言葉として「持続可能性(sustainability)」と「多様性(diversity)」がある。2010年は国連によって「国際生物多様性年(International Year of Biodiversity)」と定められており、後者の「多様性」については、ますます議論が盛んになると予想される。とくに話題となるのはもちろん生物や生態系の多様性だろうが、見過ごされがちなのが民族や文化の多様性と環境との関わりである。「ヤマト」とは異なる民族・文化を残す北海道で、やや突飛な視点から両者の関係を楽しく捉え直す。

15:50 - 15:55 コメント：元村有希子

16:10 - 17:00 パネル討論

コーディネータ：元村有希子

パネリスト：中島秀之、瀬名秀明、藤崎慎吾

17:00 - 17:05 クロージング：日本学術会議北海道地区会議代表幹事 岸 玲子(北海道大学)

開始直前の会場



講演風景(鈴村副会長)



日本学術会議北海道地区学術講演会 「北海道から発信するフード イノベーション」

野口 伸

北海道大学大学院農学研究院
(日本学術会議第二部会員)

平成22年2月2日(火)午後、日本学術会議北海道地区会議と北海道大学とが主催する「市民公開講演会：北海道から発信するフードイノベーション」を北海道大学学術交流会館の講堂で開催した。

この学術講演会は、北海道開発局、北海道経済産業局、北海道、酪農学園大学、独立行政法人産業技術総合研究所北海道センター、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構北海道農業研究センターの各機関の後援を受けた。さらに北海道新聞社、朝日新聞社北海道支社、毎日新聞社北海道支社、読売新聞社北海道支社、NHK札幌放送局の各社の協賛を得て開催された。

参加者は257名であり、講堂(定員310名)がほぼ満席になるほどの盛況であった。参加者所属の内訳は、大学等が99名、試験研究機関が16名、官公庁が19名、民間企業農業団体等が40名、一般市民等が83名であった。

講演会は、佐伯浩氏(北海道大学総長)および岸玲子氏(日本学術会議北海道地区会議代表幹事、北海道大学大学院医学研究科教授)による挨拶で開会した。

講演会の第1部は「日本の食を支えるサイエンス&テクノロジー」と題し、唐木英明氏、米田雅子氏、川村周三氏、松村健氏の4名による講演が行われた。

講演会の第2部は「北海道の美味しさを丸かじり」と題し、石井智美氏、加藤淳氏、西邑隆徳氏、船附稚子氏の4名のパネリストとコーディネータの久田徳二氏によるパネルディスカッションが行われた。最後に、岡田尚武氏(北海道大学副学長・理事)による挨拶で閉会した。以下に講演内容の概要を示す。

第1部「日本の食を支えるサイエンス&テクノロジー」

1) 食事を楽しんでいますか？

唐木英明(日本学術会議副会長、
東京大学名誉教授)

国内で販売される食品の安全性は国による厳しいリスク管理で守られ、残留農薬や添加物の基準違反で健康を害した人はいない。にもかかわらず90%の消費者が「残留農薬が不安」と答える。ところがいつも無農薬野菜を購入する人は1%以下。無農薬を求める消費者運動もない。現実には農薬なしで農業生産は維持できず、添加物なしで加工食品はできない。私たちの健康を害してガンを作り、死期を早める最大のリスクは、喫煙、過食、乱れた栄養バランス、運動不足などによる生活習慣病だ。そのリスク管理は個人に任されているが、実施状況は不十分だ。例えば残留農薬や添加物と同程度の厳しいリスク管理を行えば、タバコも酒も即時禁止とすることになるが、そのような事実を知る人は少ない。残留農薬や添加物の十分に管理されたリスクに不安を持つのではなく、死を招く可能性がある生活習慣病のリスクを適切に管理することこそが健康を守り、毎日の食事を楽しくするのだが。

2) 農商工連携と建設帰農

米田雅子(日本学術会議連携会員、
慶應義塾大学理工学部教授)

地方経済が低迷するなかで、とりわけ地方の建設業は厳しい局面を迎えている。その一方で、農林水産業や商工業も過疎化の進展や後継者不足で元気をなくしている。このような状況を打破するカギは、建設業の「複業化」にあると考える。これは片手間の副業でも、農業など個人の兼業でもない。企業型農業や、環境、介護、リフォームなどをもう一つの本業とすることである。過疎の進む地方は市場規模が小さいので、建設業専業での自立は難しい。つまり、複数の本業を持つ「複業会社」になり、あれもこれも行い自立をめざすのである。特に、建設業の力を活かした「建設帰農」には、新しい農業の可能性も見え始めている。農林水産業のみならず、建設業、商工業、流通業、IT産業等の複数の業種が力を合わせる「農商工連携」が重要である。また、これらを促進するためには、業種ごとの縦割り制度の改革も必要になる。

3) 北海道米食味向上の奇跡「まぼろし」の新品種「ゆめぴりか」の食味

川村周三(北海道大学大学院農学研究院准教授)

従来からわが国で一般の消費者に一番美味しいと思われている米は「コシヒカリ」である。一方、北海道は寒冷地であり、イネの登熟期間が短く、登熟期の気温も低いために、古くから「北海道米は美味しくない」とされてきた。そこで北海道では米の食味向上を目指して、米の生産に携わる数多くの人たちが連携して長年にわたる努力を積み重ねてきた。その結果、近年、北海道米の食味は大きく向上し、日本で一番美味しいお米になった。その理由は以下の3点が挙げられる。①品種改良：品種改良によってアミロース含量が低い「ゆめぴりか」などの良食味品種が育成された。②栽培管理技術：イネの生育段階に合わせた施肥技術などの低タンパク米の生産に有効な栽培技術が開発され普及している。③収穫後技術：北海道の米の共同乾燥調製施設では、籾の自動品質検査技術、籾の精選別技術、玄米の精選別技術の開発などにより、高品質な玄米の生産が可能となった。また冬季の自然の寒さを利用した籾の超低温貯蔵により、夏まで籾を氷点下で貯蔵し、新米と同等の品質の米を安定供給している。

4) 植物工場の現状と新たな展開

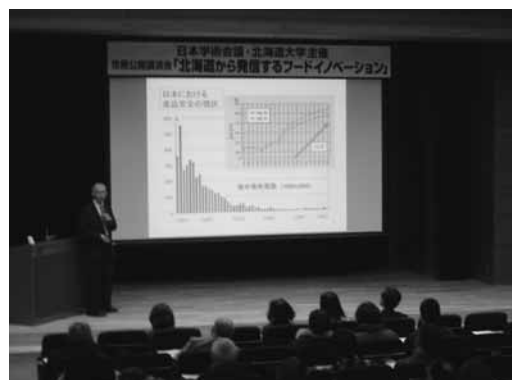
松村 健（産業技術総合研究所
植物分子工学研究グループリーダー）

近年、遺伝子組換え植物による生産系を用いて、医療用原材料をターゲットとしたPlant made pharmaceuticals (PMPs) の研究開発が欧米の企業を中心として精力的に進められている。産業技術総合研究所では、これらの技術開発から新産業を創出するためのパイロットプラントとして、栽培から製剤化までの一連のPMPs製剤化システムの構築を目指した「密閉型遺伝子組換え植物工場」施設を設計・開発した。PMPs遺伝子組換え植物は、野外栽培では気候変動のため品質管理や計画生産が難しい。「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」に基づく組換え体の環境中への拡散防止対策（封じ込め対策）を講じながら遺伝子組換え植物の栽培を行うために適切な空調条件について検討を進めている。「密閉型遺伝子組換え植物工場」は、遺伝子組換え植物をもちいて医薬品原料を生産するための事業展開性が充分想定されると共に、本パイロットプラントから得た知見は、新たなものづくり産業の創出につながる事が期待される。

第2部「北海道の美味しさを丸かじり」

- 1) 北海道産の牛乳・乳製品と私たち
石井智美（酪農学園大学酪農学部教授）
 - 2) 北海道の豆と野菜でヘルシー＆ビューティー
加藤 淳（北海道総務部試験研究機関改革推進室主幹）
 - 3) 北海道産食肉の美味しさと魅力
西邑隆徳（北海道大学大学院農学研究院准教授）
 - 4) 米粉を使って道産米も道産小麦もWin Winな関係
船附稚子（北海道農業研究センター主任研究員）
- コーディネータ
久田徳二（北海道新聞木古内支局長）

なお、講演会の総司会は野口伸が務めた。講演会の後援、協賛の関係各機関、および講演者、パネリストなどご協力者各位に深謝いたします。



平成21年度実施の地区事業

北海道地区学術講演会等の実施状況は次のとおりです。

・学術講演会

①平成21年11月7日(土)

公立はこだて未来大学講堂(函館市)

「北海道から地球の未来を考える」

特別講演「地球の未来を考えるために」

人文学・社会科学が果たす補完的役割」

日本学術会議副会長 鈴木興太郎

総合司会：元村有希子(毎日新聞科学環境部記者)

講演：「ITは人類を救うか？」

日本学術会議連携会員，

公立はこだて未来大学学長 中島 秀之

講演「青い空から未来を語ろう」

SF作家 瀬名 秀明

講演「SF的視点からの『多様性』」

SF作家 藤崎 慎吾

パネルディスカッション

コーディネータ：元村有希子

パネリスト：中島秀之，瀬名秀明，藤崎慎吾

②平成22年2月2日(火)

北海道大学学術交流会館(札幌市)

「北海道から発信するフードイノベーション」

特別講演「食事を楽しんでいますか？」

日本学術会議副会長 唐木 英明

総合司会：野口 伸(日本学術会議会員，

北海道大学大学院農学研究院教授)

第一部 講演「日本の食を支えるサイエンス&テクノロジー」

「農商工連携と建設帰農」

日本学術会議連携会員，

慶應義塾大学理工学部教授 米田 雅子

「北海道米食味向上の奇跡“まぼろし”の新品種「ゆめぴりか」の食味」

北海道大学大学院農学研究院准教授

田畑 伸一郎

「植物工場の現状と新たな展開」

産業技術総合研究所ゲノムファクトリー

研究部門リーダー 松村 健

第二部 パネルディスカッション「北海道の美味しさを丸かじり！」

パネリスト

「北海道産の牛乳・乳製品と私たち」

酪農学園大学酪農学部教授 石井 智美

「北海道産の豆と野菜でヘルシー&ビューティー」

北海道総務部 試験研究機関改革推進室主幹

加藤 淳

「北海道産食肉の美味しさと魅力」

北海道大学大学院農学研究院准教授

西邑 隆徳

「米粉を使って道産米も道産小麦もWin Winな関係」

北海道農業研究センター主任研究員

船附 稚子

コーディネーター

北海道新聞社木古内支局長，記者 久田 徳二

・北海道地区会議サイエンスカフェ

①平成21年9月24日(金)

函館市地域交流まちづくりセンター

Caféオタジラ

「単細胞が迷路を解く!？」

講師：中垣俊之氏(北海道大学電子科学研究所

准教授)

②平成21年12月14日(月)

北海道教育大学旭川校P202教室(旭川市)

「地図がひらく世界」

講師：碓井照子(日本学術会議会員，

奈良大学文学部教授)

氷見山幸夫(日本学術会議連携会員，

北海道教育大学旭川校教授)

・北海道地区会議運営協議会

①平成21年5月26日(火)北海道大学(札幌市)

議題1 平成20年度事業報告書について

議題2 日本学術会議地区会議代表幹事会報告について

議題3 平成21年度事業計画(案)について

議題4 その他

②平成21年7月21日(火)北海道大学(札幌市)

議題1 平成21年度第1回学術講演会の開催について

議題2 サイエンスカフェの開催について

議題3 北海道地域の活性化方策と日本学術会議北海道地区の役割について

議題4 その他

- ③平成21年10月27日(木)北海道大学(札幌市)
- 議題1 平成21年度北海道地区学術講演会の開催について
- 議題2 第2回サイエンスカフェの開催について
- 議題3 北海道地域の活性化方策と日本学術会議北海道地区の役割について
- 議題4 その他

・北海道地区会議科学者懇談会

- ①平成21年11月7日(土)
- 公立はこだて未来大学(函館市)
- 議題1 地区会議の在り方等について

議題2 その他

- 鈴村副会長を囲んで
- ②平成22年2月2日(火)北海道大学(札幌市)
- 議題1 地区会議の在り方等について
- 議題2 その他
- 唐木副会長を囲んで
- ・北海道地区会議懇談会
- 平成22年2月2日(火)北海道大学(札幌市)
- 議題1 日本学術会議北海道地区会議等について
- 議題2 その他
- 唐木副会長を囲んで

【ご案内】平成22年度第1回学術講演会の開催について

北海道地区会議では、『北海道から発信するグリーンイノベーション』をテーマに以下の概要で学術講演会を開催いたします。詳細については、後日ご案内いたしますので、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

記

日時：平成22年11月15日(月)

会場：北海道大学学術交流会館・講堂

主催：日本学術会議北海道地区会議，北海道大学講演等：

【基調講演】大垣眞一郎(日本学術会議副会長)

【講演】

- ・三澤弘明
(北海道大学電子科学研究所所長・教授)
「見えない光，赤外線を利用する太陽電池」
- ・長野克則(北海道大学大学院工学研究院・教授)
「北海道における地中熱ヒートポンプシステムの環境貢献と経済効果」

- ・古月文志
(北海道大学大学院地球環境科学研究院・教授)
「日常生活をもっと便利にする北大発のナノテクノロジー」
- ・阿部 竜
(北海道大学触媒化学研究センター・准教授)
「太陽光エネルギー利用と環境浄化のための新しい光触媒技術」

【パネルディスカッション】

モデレーター：佐藤のりゆき
(フリーキャスター，
北海道大学創成研究機構
客員教授)

パネリスト：上記講演講師4名，
近久武美
(北海道大学大学院工学研究院・
教授)，
加藤昌子
(北海道大学大学院理学研究院・
教授)

第21期地区会議構成員

第21期北海道地区会議構成員は会員および連携会
員で構成されている。

(職名は平成21年度)

[会 員]

山 岸 俊 男	第一部会(北海道大学大学院文学研 究科教授)
今 井 浩 三	第二部会(札幌医科大学長)
岸 玲 子	第二部会(北海道大学大学院医学研 究科教授)
戸 塚 靖 則	第二部会(北海道大学大学院歯学研 究科教授)
野 口 伸	第二部会(北海道大学大学院農学研 究院教授)
岸 浪 建 史	第三部会(釧路工業高等専門学校長)
[連携会員]	
浅 香 正 博	北海道大学病院長
家 田 修	北海道大学スラブ研究センター教授
岩 熊 敏 夫	北海道大学大学院地球環境科学研究 院長, 教授
上 田 一 郎	北海道大学大学院農学研究院教授
魚 崎 浩 平	北海道大学大学院理学研究院教授
梅 村 孝 司	北海道大学大学院獣医学研究科長, 教授
岡 田 尚 武	北海道大学理事・副学長
長 田 義 仁	独立行政法人理化学研究所基幹研究 所連携研究部門長, 北海道大学名誉 教授
小 野 有 五	北海道大学大学院地球環境科学研究 院教授
小野江 和 則	北海道大学遺伝子病制御研究所教授
加 藤 昌 子	北海道大学大学院理学研究院教授
廉 澤 剛	酪農学園大学附属動物病院長, 教授
蟹 江 章	北海道大学大学院経済学研究科教授
亀 田 達 也	北海道大学大学院文学研究科教授
喜 田 宏	北海道大学人獣共通感染症リサーチ センター長, 大学院獣医学研究科教授
木 村 俊 範	北海道大学大学院農学研究院教授
小 池 隆 夫	北海道大学大学院医学研究科教授
甲 山 隆 司	北海道大学大学院地球環境科学研究 院教授
小 柴 正 則	北海道大学大学院情報科学研究科 長, 教授
齊 藤 誠 一	北海道大学大学院水産科学研究院教授
佐 伯 浩	北海道大学総長
笹 谷 春 美	北海道教育大学札幌校教授

佐 藤 昇 志	札幌医科大学医学部教授
島 本 義 也	東京農業大学生物産業学部教授, 北 海道大学名誉教授
清 水 康 行	北海道大学大学院工学研究科教授
高 島 郁 夫	北海道大学大学院獣医学研究科教授
田 中 勲	北海道大学大学院先端生命科学研 究院教授
谷 口 旭	東京農業大学生物産業学部教授
丹 保 憲 仁	北海道開拓記念館館長, 北海道大学 名誉教授
土 屋 博	北海学園大学大学院文学研究科教 授, 北海道大学名誉教授
藤 堂 省	北海道大学大学院医学研究科教授
富 田 房 男	放送大学北海道学習センター所長, 北海道大学名誉教授
仲 真紀子	北海道大学大学院文学研究科教授
長 澤 徹 明	北海道大学大学院農学研究院教授
中 島 秀 之	公立ほこだて未来大学学長
新 川 詔 夫	北海道医療大学個体差健康科学研究 所所長
西 村 正 治	北海道大学大学院医学研究科教授
橋 本 努	北海道大学大学院経済学研究科准教授
長谷川 晃	北海道大学大学院法学研究科教授
畠 山 昌 則	北海道大学遺伝子病制御研究所教授
晴 山 雅 人	札幌医科大学医学部教授
氷見山 幸 夫	北海道教育大学旭川校教授
福 井 孝 志	北海道大学大学院情報科学研究科教授
福 田 諭	北海道大学大学院医学研究科教授
藤 川 清 三	北海道大学大学院農学研究院教授
藤 永 弘	青森公立大学経営経済学部教授
逸 見 勝 亮	北海道大学理事・副学長
松 田 一 郎	北海道医療大学学長
馬 渡 駿 介	北海道大学大学院理学研究院教授
身 崎 壽	北海道大学大学院文学研究科教授
宮 下 和 夫	北海道大学大学院水産科学研究院教授
毛 利 哲 雄	北海道大学大学院工学研究科教授
望 月 恒 子	北海道大学大学院文学研究科教授
本 村 泰 三	北海道大学北方生物圏フィールド科 学センター室蘭臨海実験所教授
桃 木 芳 枝	東京農業大学生物産業学部教授
山 本 克 之	北海道大学大学院情報科学研究科教授
塚 本 尚 義	北海道大学大学院理学研究院教授
吉 田 克 己	北海道大学大学院法学研究科教授
若 土 正 暁	北海道大学名誉教授
渡 辺 雅 彦	北海道大学大学院医学研究科教授
渡 辺 義 公	北海道大学環境ナノ・バイオ工学研 究センター長, 特任教授

日本学術会議北海道地区会議

北海道大学学術部研究協力課
〒060 0808 札幌市北区北8条西5丁目
電話(011)706 2155 FAX(011)706 4873